

# 「言い誤り」(Speech Errors)の傾向に 関する考察 (III)

伊 藤 克 敏

十数年前 MIT (マサチューセッツ工科大学) における M. Garrett と J. Ross の「言い誤り」(speech errors) に関するセミナーに出席以来、言い誤りについて折に触れデータを収集して来た。今回は伊藤 (1992) に引続き、手元にあるデータの一部の分析を試みる。

## I. 音声レベルの誤り

### 〔1〕 同化現象

#### a) 順行同化

- (1) ショッピ(キ)ング ピンク
- (2) きもも(の)も
- (3) くちぶ(び)る
- (4) ちえ(せ)んえん (千円) のチェーンベルト
- (5) ちょ(そ)うちょう (早朝)
- (6) かまくま(ら) (鎌倉)
- (7) まるやまさま(ん)
- (8) ゲゲゲのゲ(キ)タロウ
- (9) いちじていじ(し) (一時停止)
- (10) ポ(パ)ンフレットとポスター
- (11) あめのちはめ(れ)
- (12) くるみとわかみ(め)
- (13) きのうきもう(の) (着物) で……
- (14) だんで(れ)いぼう (暖冷房)
- (15) つうこうこ(りょ)う (通行量)
- (16) 雨もりでおこもま(ま)りの方……

- (17) ランチョンマツチョン(ト)
- (18) 書類しょ(そ)う検される
- (19) 今日キリスト教休きょ(こ)うなの
- (20) なつ(夏)まつ(ち)中を歩く
- (21) ねなしぐしさ(根なし草)
- (22) どうしたんだ(で)しょう
- (23) せつじつ(切実)なせ(さ)けび

(2)は左右を m で挟まれた n が m に変化したものである。(3)は語頭の ku に引っぱられて bi が bu に変化したのか、語尾の ru に影響されたのか不明である。両方に引っぱられたと見るのが自然かも知れない。(6)は同じ音の繰り返しで「重複」(reduplication)化現象といえよう。(8)(9)は両方共、濁音化現象で、濁音の方が発音しやすいといえよう。(14)は語頭の da に引かれて re が de になったもので、/r/が/d/に置換えられるのは幼児音でもよく見られる現象である(例 ラジオ→ダジオ)。(17)は重複化現象で/t/が/tʃ/に置換えられ/n/が付加されている。(19)は「今日」「教」に引っぱられて休講の講が/kyo/と口蓋化したもので、同じ音の繰り返しが発音の容易化に貢献しているといえよう。(20)は夏の/tsu/に引かれて後続の/matʃi/の/i/が/u/に変わったもので、i → u 現象である。

#### b) 逆行同化

- (1) わたす(し)が渡す
- (2) あため(ま)を痛める
- (3) 九かく(ん)鳥がかくれる
- (4) 開かん(い)(会)式の時かん
- (5) 心おく(き)なく
- (6) おばん(あ)ちゃん
- (7) 90まいい(ん)まいいの紙幣を数える
- (8) だい(ん)たい(団体)
- (9) 小学きょう(校)の教頭
- (10) 観きょ(こ)うきゃく
- (11) 返かきゃく期かんを守って下さい
- (12) ワイキち(キ)ビーち

- (13) せい(総)動員せよ
- (14) たまれ(疲れ)がたまっている
- (15) あけめ(ま)しておめでとう
- (16) きみさ(た)ちさんにん
- (17) だ(な)んだか……
- (18) ぼ(お)んぼろ
- (19) ぼ(お)ぼえない

(1)は順行同化(3)の場合と同様に  $i \rightarrow u$  の置換で、東北地方の方言では「わたし」を「わたす」と発音する傾向がある。(2)と(15)は後続の *me* に引かれて *ma* が *me* に置換えられたものである。(3)(4)は共にかなり後の影響を受けて音変化を起こしている。発話計画が相当先まで行われている証拠となっている。(5)は(1)と同様  $i \rightarrow u$  の変化である。順行同化(3)(20)でもあったように  $i \rightarrow u$  変化はかなり多く、発音しやすさと関係があるようである。3歳5カ月の幼児がビックリをブックリと発音しているのは興味深い。(7)(8)は「音節重複化」の一種で、同じ音を繰り返すことによって発音を容易にしている、といえよう。(9)(10)は口蓋化で、やはり発音の容易化に貢献している、といえよう。(11)は非口蓋化現象となっている。(12)の  $/ki/$  の  $/tʃi/$  への置換は、一種の前方位化である。(14)は後続の「たま」の逆行同化で、「つか」が「たま」に置換わった訳で、「音節重複」化的現象である。

## 〔2〕音交換

- (1) 後ざすり
- (2) まぎわらしい
- (3) めぐるましい
- (4) ふいん気(雰気)
- (5) 手ばさき
- (6) おすくり
- (7) サンタンソーダ
- (8) きるこ(記録)
- (9) 手もちぶたさ
- (10) 缶りき
- (11) 佐渡おさけ

- (12) オレンジドーロ
- (13) エベレータ
- (14) 入りたびる
- (15) ワナナバニ園 (バナナワニ園)
- (16) どくろを巻いた
- (17) 政治きしん (資金)
- (18) きさだと大学 (北里大学)
- (19) かたがかわい (皮が固い)
- (20) うんど (うどん)
- (21) こうのしゅうはん (週の後半)
- (22) じかんのゆするかぎり
- (23) おさがわせ
- (24) しょうちょう (嘲笑)

(1) は atozasuri で /u/ と /a/ が交換したことになる。(3) の megurumasii は /me/ の後に来るべき /ma/ が 2 音節後にずれたと見るべきであろうか。(7) は /s/ と /t/ は調音点が似ており、幼児の言語習得においても /s/ が /t/ に置換わることが多く (例 kaat (← s) an), 類似音は交換しやすい。(8) の /kiruko/ は /o/ と /u/ が交換している。(9) も (7) 同様, /s/ と /t/ が類似音であるため交換したものと考えられる。(12) は /r/ と /d/ とが音響的に類似しており、幼児も /r/ と /d/ で置換えて発音する場合がある (例 d(r) oosoku)。 (19) は /k/ という音環境が類似しているため /t/ と /w/ の音交換が行われたものと思われる。(21) も後続の /u/ という類似環境のため, /k/ と /f/ の交換が起ったものと思われる。(24) は音環境と /s/ と /tʃ/ の調音上の類似から交換が生じたのであろう。幼児音では /s/ が /tʃ/ に置換えられることが多い (例 ch(s)umi)。

### 〔3〕 子音転移

#### a) /s/ → /ʃ/

- (1) サービシュ(ス)
- (2) 田代しゃん(さん)
- (3) 本当でしゅ(す)
- (4) シャンション(ソン)
- (5) 学校の調しゃ(さ)表

- (6) 半袖から長しょ(そ)で
- (7) あらわしゅ(す)
- (8) しゅっしょ(そ)う(出走)
- (9) しえ(せ)つめい(説明)する
- (10) ニューシュ(ス)(ニュース)

緊張音の/ス/が弛緩音の/シュ/(英語のfとちがって弛緩(Lax)音)に転移する例は、幼児音(otoof(s)an)や方言(fenaka [鹿児島])に多い。

b) /f/→/tʃ/

- (1) タカチ(シ)マヤ(高島屋)
- (2) ディスカッチョ(ショ)ン
- (3) れんち(し)ゅう(練習)
- (4) まんち(し)ゃ(満車)
- (5) でんち(し)ゃ(電車)
- (6) ほち(し)じるしをつける

すでに伊藤(1992)で指摘したように、幼児の音の発達順序から/tʃ/の方が/f/よりも先に習得されるようで、/f/が/tʃ/に置換わることは、より易しい音に後退(regression)すると考えられる。

c) /s/→/t/

- (1) だいた(さ)ん土曜
- (2) てきて(せ)い(適性)検査
- (3) かた(さ)なった

(1)と(2)は同化とも考えられるが、/s/が/t/に置換わる現象は伊藤(1984, 1985)でも指摘しているように、幼児音の特徴でもあり、習得困難音の/s/が調音点の類似している/t/に置換えられたものと思われる。

d) /z/→/ʒ/

- (1) じょ(ぞ)うさん(象さん)
- (2) 民じょ(ぞ)く(民族)

/z/から/ʒ/への転移は幼児音(例 omiʒu(お水))や、方言音(例 zeikin(税金)[福岡])にもみられる。

e) /ʒ/→/z/

(1) ざ(じゃ)んそう(雀荘)

(2) メロンズ(ジュ)ース

#### 〔4〕 母音の転移

a) /a/→/e/

(1) ということね(な)んですね

(2) ながしめ(ま)くん

(3) ベレ(ラ)ンダ

(4) ここのけ(か)(九日)

b) /i/→/u/

(1) ず(じ)ぶん

(2) もる(り)おか

(3) とつ(ち)ぎ

c) /i/→/e/

(1) エ(イ)ラスト

(2) じめ(み)んとう(自民党)

「大開きのア〔a〕は口を大きく開き、舌はだいたい平らかである。下顎の運動という点では一番労力を必要とする」(田井, 1978, 181頁)。こういった論からすると、ヤコブソンの/a/が「最善母音」(optimal vowel)で「基本的(原初的)母音である」とする論に疑問を投げかけたくなる。日本語の音変化でも/a/が/e/に変化する例が多い。例えば「ウミバタ」(海端)がウミベタと変化したり、マケル(負ける)がメゲル、マケズニ(負けずに)がメゲズニに転音している。九州方言ではハグ(剥ぐ)をヘグ、ナメルをネブルという。

また、/i/が/u/に転移する例は、同化現象においても多くみられたし、方言ではニジ(虹)をヌジとかノジという。

c) の/イ/→/エ/の誤用例は、伊藤(1992)でもかなり多くの例を挙げている。幼児音でも「エンペ(ピ)ツ」「ミエナイ」が「メエナイ」, 「イバル」が「エバル」になりやすい。言語障害者にとっても/イ/は発音困難で、/エ/に置換えられやすい(笹沼他, 1986)。

#### 〔5〕 音の脱落

a) /s/音

(1) おたの(し)みいただきましよう(TV)

- (2) くだ(さ)る
- (3) どういた(し)まして
- (4) お(そ)ぼの(祖母の)
- (5) さんひ(し)ょく昼寝つきの

/s/の脱落は/s/が緊張音であるためと思われる。幼児の言語習得でも/s/の脱落は多いし、また方言においても同じことがいえる(伊藤, 1986)。

b) /r/音

- (1) 数えら(れ)なくて
- (2) いら(れ)なくて
- (3) ひう(る)ま

/r/音の脱落についても同じことがいえるようである。方言における/r/の脱落について井上(1984)は、山形県地方の方言である「コシャウ」は「こしらえる」の/r/が脱落し、/s/が口蓋化して生じたものであろう、としている。また、同じく鶴岡市付近の「チエデ」「シエデ」は「いずれもツレテのrが脱落して生じたものと思われる」(146頁)としている。三重県の鈴鹿地方の方言でも「コサエル」(こしらえる), 「ツエッタロカ」(連れて行ってやろうか)という形が使われる。幼児音では「チエッテ」(つれてって)という段階がある。

〔6〕音の付加

a) 口蓋音化 (palatalization)

- (1) しゃんみゃく(山脈)
- (2) 時きょく(時刻)
- (3) 新東京きょく(国)際空港
- (4) きゃい(会)社
- (5) トリョ(ロ)ピカル
- (6) 雪だりゅ(る)ま
- (7) 観きょう(光)が目的で……
- (8) きゅうきょ(急行)

(1)(3)(4)(8)は前後の口蓋音に影響された一種の同化現象とみられる。田総(1982)は/y/音化の例を40例挙げ、/kyo/が最も多く、次に/ryo/が7例、/kya/が5例である、としている。

このような口蓋化を「拗音」と呼び、かな一字で書き表わすことのできる音節の「直音」に対してしている。田井（1978）は拗音とその歴史的発展について、次のように述べている。「子音と母音の間に半母音〔j〕〔w〕が介在している音節構造が、ねじれるという感じを与えるので拗音という。平安時代にはサ（者）、パウ（病）、ラウ（良）など、直音で表記する例が多かったが、鎌倉時代になると、シャ、ビャウ、リャウなど拗音化の表記が固定化した。全子音の中でいちばん発音が容易な〔j〕と結合して単音を形成する拗音は、原形にくらべて発音が容易である」（383頁）。

また、音声学の大西雅雄は「拗音は……子音と母音の間に渉り音が挿入されて調音点の移りをよくしたのである」（国語音声学、56頁）と述べている<sup>1)</sup>。

#### b) 同じ音の付加

- (1) 言われれると……
- (2) ひっばたたいて……

重複音節のように同じ音を繰り返すことは、音の容易化に関係があるように思われる。幼児も「チガガデタ」といった発音をすることがある。

#### 〔7〕 形態音素的誤用

- (1) にぎやかく(に)になりました
- (2) 行く(か)ない
- (3) 重いかった
- (4) ある(り)ます
- (5) 落着いた(て)いました

(1)は「やかましく」「さわがしく」などといった形容詞に引かれて起った誤用と考えられる。(2)のような誤りは、幼児の発達途上言語によく見られるもので、「原形+ない」の形である。(3)(4)も同類であるが、(5)の「落着いた」の「た」は、音声上の逆行同化が形態音素上の不完全と見るか判断し難い。

## II. 語のレベルの誤用

### 〔1〕 語の転換



- (1) 友は類を呼ぶ
- (2) 無芸は多芸
- (3) 足に地がついた生き方
- (4) 公正明大
- (5) 勉強に手がつかない
- (6) 手を職につける

(1)(2)(3)(4)のように一つの固まりとしての表現の内部の語同士が転換する場合が多い。田総(1982)でも「政権替交」「監督保安」等が挙げられている。

## 〔2〕 混合 (blending)

- (1) でけど (だけど+でも)
- (2) ジューニュー (ジュース+牛乳)
- (3) とよの (富山+長野)
- (4) まらんだ字を書く (まなんだ+ならった)
- (5) このお菓子いたら来なさい (いるなら+ほしかったら)
- (6) それでどったの
- (7) どくゆう (特有+独特)
- (8) しんこんしき (新婚旅行+結婚式)
- (9) りかん (りんご+みかん)
- (10) あしなの (あしのふみばのない)
- (11) やんまり (やっぱり+あんまり)
- (12) ピンツ (ピンクのパンツ)

意味の似ている語同士は「混合」しやすい。例えば(1)は大体同じ意味を持つ接続詞、(2)は飲物という共通項を持っており、(5)(7)(8)(9)も同じようなことがいえよう。音声的な類似で混同する例が(6)(11)で、表現が短縮された例が(12)である。

田総(1982)は意味上の類似点で混合して、一つの単語を作り出す例を挙げている(265頁)。

- (1) やぶる×さく→やぶく
- (2) とらえる×つかまえる→とらまえる
- (3) 便利だ×都合がいい→便利がいい
- (4) breakfast×lunch→brunch

- (5) smoke × fog → smog

### III. 統語上の誤用

#### 〔1〕 助詞の誤用

- (1) ジャがいもが(を)入れる
- (2) ジュネーブが(で)講義した
- (3) くつが(を)はく
- (4) 車を(で)運んだ
- (5) 消しゴムに(を)貸した

(1)から(3)までの「が」は、文頭の語（主語の場合が多い）に「が」のつく確率が高いのでつい、主格助詞の「が」をつけてしまったものと思われる。伊藤（1990）で、「最初の名詞＋がストラテジー」と呼んでいるが、「文頭名詞＋がストラテジー」と改めた方がよいように思われる。

#### 〔2〕 助詞の脱落

- (1) バス(に)乗りたい
- (2) 海(で)泳ぐ
- (3) 飛行機(で)食べよう
- (4) 頭(に)来る
- (5) 御存知(な)のは……
- (6) ロケット(と)して……
- (7) 音(と)ともに……
- (8) される(ことに)なる

(1)(2)(3)は場所を表わす助詞で、(5)と(8)はいわゆる「補文形態素」(complementizer) と呼ばれるものである。(6)(7)は「と」という音が重なるために脱落してしまったのかも知れない。

#### 〔3〕 自・他動詞の誤用

- (1) 起きて(起こして)
- (2) 出てくる(出してくる)
- (3) 火をつい(つけ)といた

自動詞を他動詞的に使う誤用は、伊藤（1985, 1988）で詳しく扱っている。こういった自動詞を他動詞に代用する傾向は、幼児の発達途上言語 (developing language) の特徴の一つであり、こういった成人の誤

用は幼児言語への「退行」(regression)現象である、といえよう。

〔4〕 使役化の誤用

- (1) 食べる(食べさせる)
- (2) そらさせ(す)ような

(1)は使役化すべきところ、他動詞の原形のままになってしまった訳で、他動詞と使役化との関係性が示唆されている。(2)は使役形の「基底形」(underlying form)がそのまま表層化したもので、こういった中間形は幼児言語にもみられるものである(伊藤, 1990)。

IV. 意味的誤用

〔1〕 量, 数

- (1) 記者の数が余りにも大きい(多い)ので、よい試合をしなくては……
- (2) 料理が大きい
- (3) 大きい風

「大きい」「小さい」が全ての数や量について用いられる誤用は一般的で、幼児の言語習得途上にも多く見られる誤用である。

小さい(少し)入れて(2歳11カ月)

〔2〕 いる ↔ ある

- (1) 犬ある
- (2) イチゴたくさんいる

日本語では存在を表わす動詞に、生物には「いる」、無生物には「ある」の二通りがあるが、これらはよく混同され、幼児も、

モウフ イタ(2歳1カ月)

といった誤用をする(詳しくは伊藤(1994), 189~190頁を参照)。

〔3〕 反意語

- (1) わかりません(←わかります)
- (2) 喫煙(禁煙)
- (3) (電話を)後で切る(かける)
- (4) 反発しない(する)のも無理ない

〔4〕 着 用

- (1) ズボンを着る(はく)

## (2) パジャマをはく（着る）

着用に関する語彙は日本語においてかなり多く、誤用される場合が多い。また、幼児も言語発達途上で、

メガネ ヌイダ（4歳）

トケイ カケテル（3歳7カ月）

等、誤用が多い（伊藤，1990）。

## む す び

伊藤（1988，1989）で提出したいくつかの誤用の傾向と重なる部分もあるが、誤用について注目すべき点を下記する。

(1) 誤用はテレビやラジオの放送のように、緊張した場面で起こりやすく、その場合

（豆が）残っていらっしゃいます（TV）

のように、無生物主語にも丁寧表現の代りに敬語を使う、という滑稽な誤用もみられる。

(2) 上で指摘したように誤りの多くは、幼児が言語発達途上で示す誤用と類似する傾向が強い。これは一種の「退行」現象で、完全な形にするための生成規則の適用が、不完全のまま表現化したものである。こういった誤りの傾向は失語症の診断にも役立つものと思われる。また、日本語を外国語として習得している学習者の習得方略や習得度合の検討にも役立つであろう。

例 はっきり覚える（覚えている） （中国からの帰国者）

(3) 深層心理が表われるフロイト的誤用の研究は余りなされていないが、次のような例がある。

① 勝手に植えておいてくれる？

② 長々とお話をいただき有難うございました

①は植物の苗を買ってきて畠を耕やしたりして植える準備を整えていたのに、相手が仲々手伝おうとしなかったために、イライラして発したもので、「好きなように」とすれば、感情的に中立的なものとなる。②は或る講演の司会者が、予定の時間を大幅に超過した講演者に対して発したお礼の言葉で、「長々と」に司会者の感情がこめられている。「長時間」といえばそのような含意はなくなる。

注

- 1) 田総(1982, 151頁)に依る。

参考文献

- 井上史雄(1984).『新しい日本語—《新方言》の分布と変化』明治書院。  
(1994).『方言語の新地平』明治書院。  
伊藤克敏(1985).「言い誤りの心理言語学的考察」神奈川大学『人文研究』第91集。  
(1988).「『言い誤り』(Speech Errors)の傾向に関する考察(Ⅰ)」神奈川大学言語研究センター『神奈川大学言語研究』第11号。  
(1990).『こどものことば—習得と創造』勁草書房。  
(1992).「『言い誤り』(Speech Errors)の傾向に関する考察(Ⅱ)」神奈川大学言語研究センター『神奈川大学言語研究』第14号。  
笹沼澄子・柴崎良子編(1986).『ことばを取戻した子どもたち』大修館書店。  
田井信之(1978).『日本語の語源』角川書店。  
田総武光(1982).『言葉のとちり』今井書店。